

座禪草

森岡 正作

雉子鳴いて

勢よく水吸ふ山毛櫨や獵期果つ
川底を覗き見る癖春浅し
エンドロールに続き降り積む春の雪
余寒なほ湯呑の窪の手に馴染み
泥靴の屈みおろがむ座禪草
雪解川越え激辛のカレー欲る
杣人の鉈を掛けたる落し角

家の近くに丘陵があつて、そこに棲みついている雉が裏の畑まで餌を漁りに来る。朝その鳴き声に目覚めたりするのであるが、国鳥だけに案外と心地よい。いつぞや、野原の傾斜地で草刈り機を振り回していたのであるが、こんもりとした草の一叢で、突然奇声を上げてばたばたと駆け出す鳥がいた。予期せぬことでこちらも驚いたが、それが雉であつた。何と草刈り機の刃で雉の尾羽をバツサリと切ってしまったのである。雉は子に愛情が深く、野火で焼け死んでも子を守ろうとしたという話もあるくらいで、私の時も巣を抱いていたのであろう。

そんな話とは違つて登四郎先生の句はあくまで清々しい。「鞍馬五句」とあるうちに、〈雉子鳴いてしぐれ明るむ杉の空〉がある。深閑とした景もさることながら、さあつと降りかけた小雨が、雉の澄んだ鳴き声とともに晴れ上がってゆく様子が感じられる。